

平安京の瓦作りとその変容

古閑正浩（京都府文化財保護課）

1. はじめに

古代における瓦は、主に宮殿・役所・寺院に用いられている。ここでは、遷都から 10 世紀頃までの瓦作りとその変容をたどる。都を造営し、維持していく過程にふれ、その背景を素描してみる。

2. 瓦葺き建物と造瓦工房

(1) 平安宮中枢施設とその配置

(2) 造瓦工房の操業条件

- ・瓦窯の構築。埴土と薪と水の調達。運搬経路と運搬手段の確保。労働力の編成。

(3) 造瓦工房における主な作業（『延喜式』木工寮、作瓦条）

- ・粘土と砂の混合→生瓦の整形→乾燥→焼成→検品→運搬

3. 桓武朝における遷都と造瓦

(1) 長岡京の造瓦体制の特質

- ・旧都（難波宮・平城宮）の解体と新京の造営が連動した一体的な事業。
- ・旧都（難波宮・平城宮）の再利用瓦を主体的に用い、新調瓦の生産は、付随的な位置付け。

(2) 平安京の造瓦体制の特質

- ・新調瓦を主体的に使用。
- ・計画的に大規模瓦窯を複数設置し、大量の瓦を安定的に調達する生産組織を構築。
- ・平安宮の中枢建物（大極殿・豊楽殿）に緑釉瓦を採用。

4. 平安京遷都による造瓦体制の構築と展開（延暦期 793～806）

(1) 瓦窯の成立と展開

- ・生産の拠点として西賀茂瓦窯を平安京の北郊に開窯する。
- ・緑釉瓦の生産は、当初は西賀茂瓦窯と吉志部瓦窯が担ったが、ただちに栗栖野瓦窯に一元化された。緑釉瓦の生産を専門化して、生産の効率と質の向上を計る。
- ・大規模瓦窯として吉志部瓦窯・大山崎瓦窯を淀川流域に開窯。
- ・西賀茂瓦窯の瓦範の一部は、吉志部瓦窯・栗栖野瓦窯・大山崎瓦窯へ移動している。
- ・西賀茂瓦窯と大山崎瓦窯では、窯の規模と規格がほぼ共通する。
- ・遷都当初の大規模瓦窯の展開は、西賀茂瓦窯を核とし、工人・瓦範・技術がここから派遣・移動し、瓦窯が拡充していく過程として理解できる。
- ・吉志部瓦窯は三国川と淀川をつなぐ開削地点、大山崎瓦窯は山崎津が近接する。両者は、水上交

通の積み出し地点を備えていたといえる。また、河川の護岸工事と瓦窯の作業を連動させて、労働力編成の効率化を計ったことも想定される。

- ・西賀茂瓦窯に東面する賀茂川では、東堀川の取水口が位置しており、ここでも河川の工事と瓦窯の作業を連動させていたことが想定される。

(2) 宮中枢施設の造営と造営官司

- ・平安宮の造営官司は、当初は造宮使が組織され、中枢施設では、大極殿・朝堂院の造営を担う。延暦 15 年（796）中には、造宮職に改組され、豊楽院等の造営に当たった。
- ・西賀茂瓦窯・吉志部瓦窯は、造宮使に統括された瓦窯として位置付けられる。これらを継続させつつ、栗栖野瓦窯と大山崎瓦窯の開窯は、造宮職への改組を契機としたことが想定される。

5. 瓦窯の再編に着手した弘仁期（810～824）

- ・対向 C 字形の軒平瓦からみた瓦窯の改廃。
- ・西賀茂瓦窯・吉志部瓦窯が閉窯し、大山崎瓦窯・栗栖野瓦窯を存続させた。
- ・「土 □松瓦屋」銘軒平瓦は、新たな瓦窯の成立を示唆している。
- ・「西」銘、「土 □松瓦屋」銘。木工寮被管の瓦屋（瓦窯）として編成。
- ・新たな瓦当文様（軒平瓦）の採用。
- ・大山崎瓦窯は嵯峨朝の終焉とともに命脈を終える。

6. 過渡期としての天長期（824～834）

- ・上庄田瓦窯は淳和院・雲林院など、淳和天皇の離宮所用瓦を生産。
- ・「上」銘を軒平瓦の瓦範に刻む。
- ・瓦窯の規模・規格が、遷都当初と比較すると変容している。焼成室は幅広くなり、瓦窯の全長は短くなる。

7. 平安時代中期への移行（承和期以降 834～）

- ・右京郊外に安井西裏瓦窯・森ヶ東瓦窯、左京郊外に池田瓦窯が開窯。
- ・承和・貞観期頃（9 世紀中頃から後半）には、栗栖野瓦窯では普通の瓦の生産を開始。
- ・栗栖野瓦窯に近在して小野瓦窯が開窯。
- ・西賀茂瓦窯の範囲には、新たに河上瓦窯が開窯。
- ・瓦窯の規模・規格は、上庄田瓦窯で生じた傾向を踏襲。
- ・「栗」「小乃」「河上」の地名表記の瓦屋銘を瓦範（型）に刻む。

8. まとめ

遷都当初の造瓦体制は、生産地を淀川流域にも所在させ、河川交通の整備と連動させながら展開した。瓦窯の再編を行いつつ、この体制は、弘仁朝まで継続した。主要な造営事業は弘仁期中には、一段落を迎える。天長期では、離宮造営の瓦生産において、瓦窯の構規模・規格に変化が生じている。この傾向は、平安時代中期に引き継がれる。それまで緑釉瓦の生産に特化していた栗栖野瓦窯は、天長・承和期以降、

普通の瓦も生産されるようになる。また、この頃から、瓦窯は平安京の周辺（北・西・東）に集中する。こうした生産体制の推移は、淀川流域の首都圏形成と関わって展開した遷都時の瓦生産から、平安京を維持するための体制に変化したことを物語る。

天徳4年（960）には内裏がはじめて焼亡する。その再建の瓦の一部は、讃岐、備前・備中、備後などの諸国から調達している。平安京周辺での生産は、恒常的な維持のための体制であり、特定の大量需要を満たすための生産は、諸国に負わせる体制を採用した。この政策は、平安時代後期の院政期にまで引き継がれる。

付記

本発表の資料のなかで力点をおいたのは、図6（新たに作図）である。前期から中期への移行期において、瓦窯の規模・規格に変化が生じたことを示している。ただし、この移行期については、軒瓦の時期的な位置付けなど、未解明な点も多い。今後の検討が待たれる。

参考文献

- 上村和直 1994 「平安京の瓦の概要」(『平安京提要』角川書店)
- 前田義明 1994 「中期の瓦」(『平安京提要』角川書店)
- 植山茂 1999 「平安時代中期の官瓦窯について」(『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』同刊行会)
- 網伸也 2011 『平安京造営と古代律令国家』塙書房
- 古閑正浩 2023 『平安京と近京圏の形成史』塙書房

調査報告書の掲示は割愛させていただいた。



図1 平安宮中心部のイラスト（南から） 画：梶川敏夫

表 平安京の造営過程と瓦生産の体制

天皇	年・月	主要施設の造営	造営担当の役所	瓦窯群による生産体制
桓武	793 延暦12年7月	平安新京巡覧	造宮使	西賀茂瓦窯、吉志部瓦窯
	794 延暦13年10月	内裏		瓦窯
	796 延暦15年元日	大極殿		瓦窯
	797 延暦16年正月	朝堂院	造宮職	栗栖野瓦窯、西賀茂瓦窯、吉志部瓦窯
平城	799 延暦18年正月			瓦窯、大山崎瓦窯
	805 延暦24年12月	豊楽院		瓦窯、瓦窯
嵯峨	806 延暦25年2月	中和院	木工寮	栗栖野瓦窯、大山崎瓦窯
	813 弘仁4年正月	東寺・西寺金堂		
	818 弘仁9年4月	殿舎諸門の号を唐風に改める		

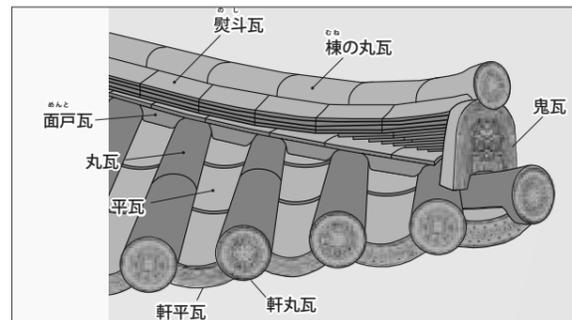


図2 瓦の名称と使用部位

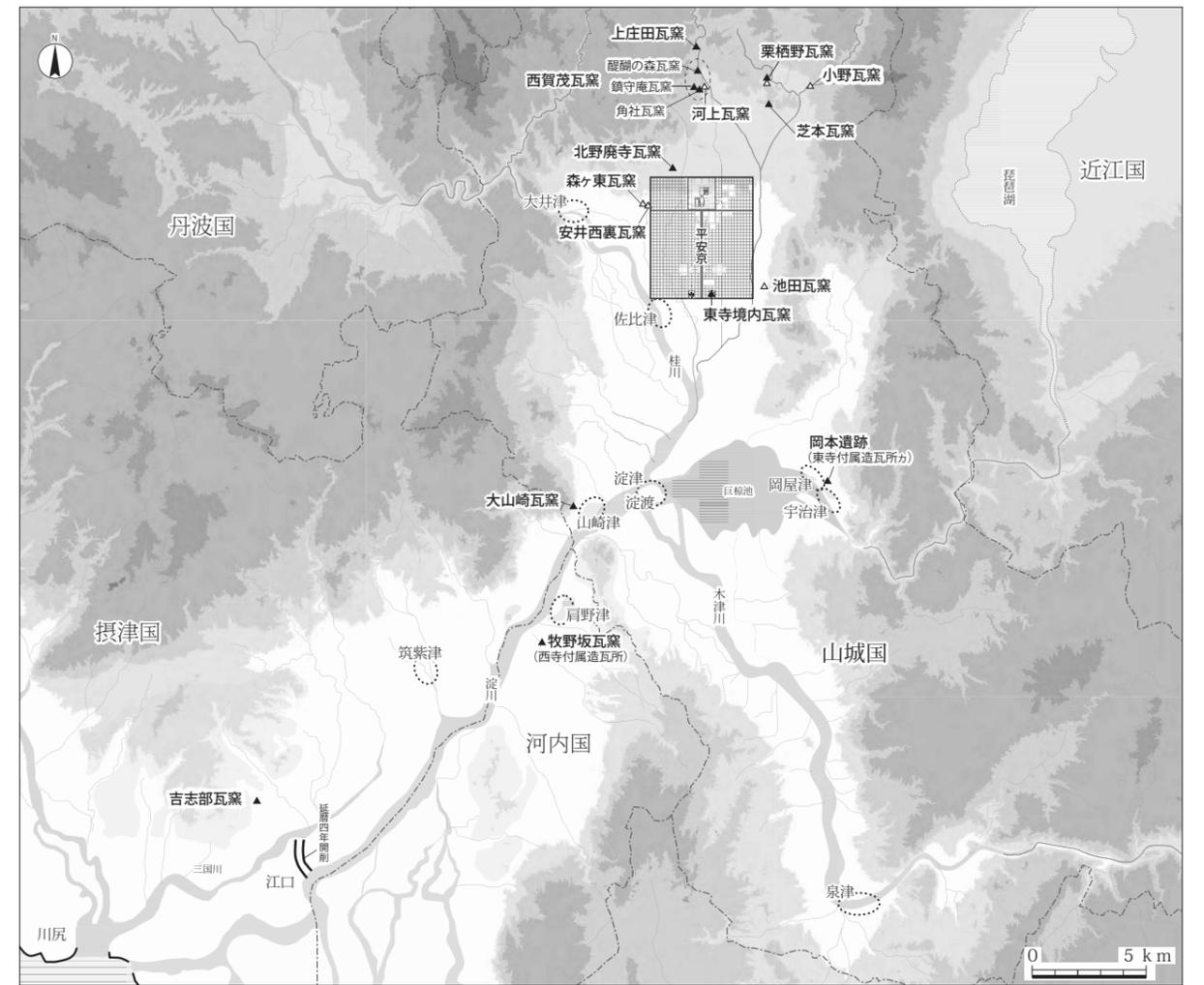


図3 平安京の瓦窯の分布（前期・中期） 1：300,000

▲前期の瓦窯 △中期の瓦窯

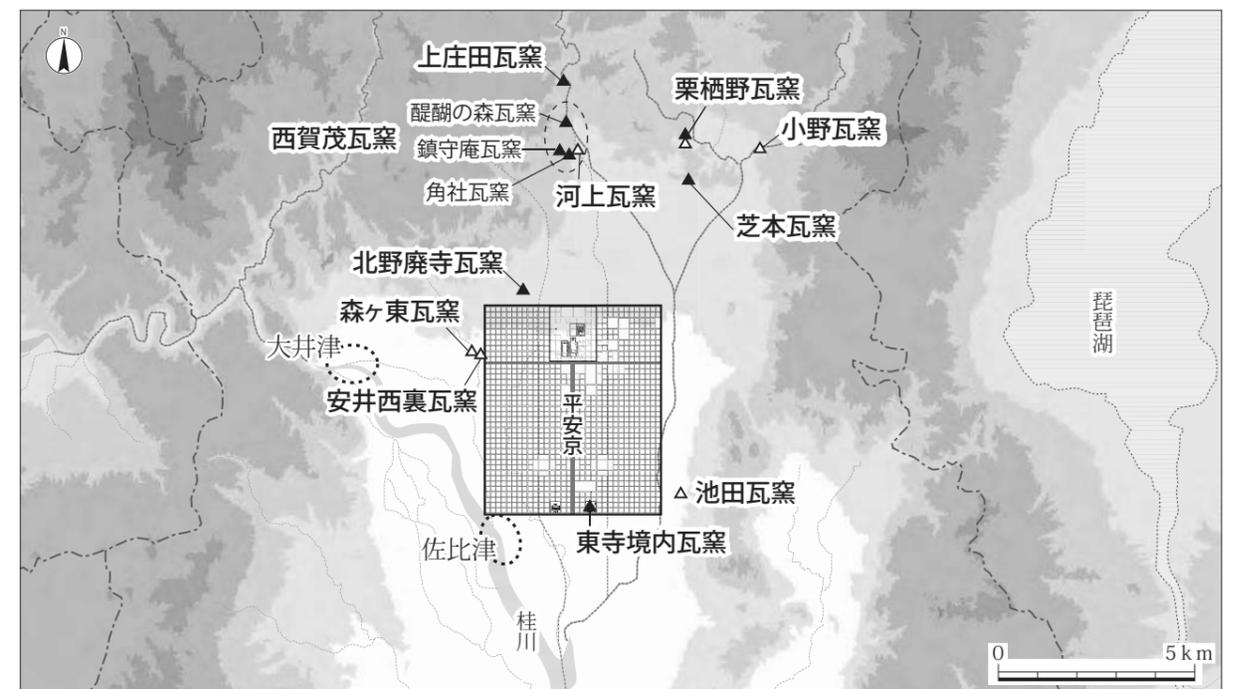


図4 平安京の瓦窯の分布（前期・中期） 1：180,000

▲前期の瓦窯 △中期の瓦窯

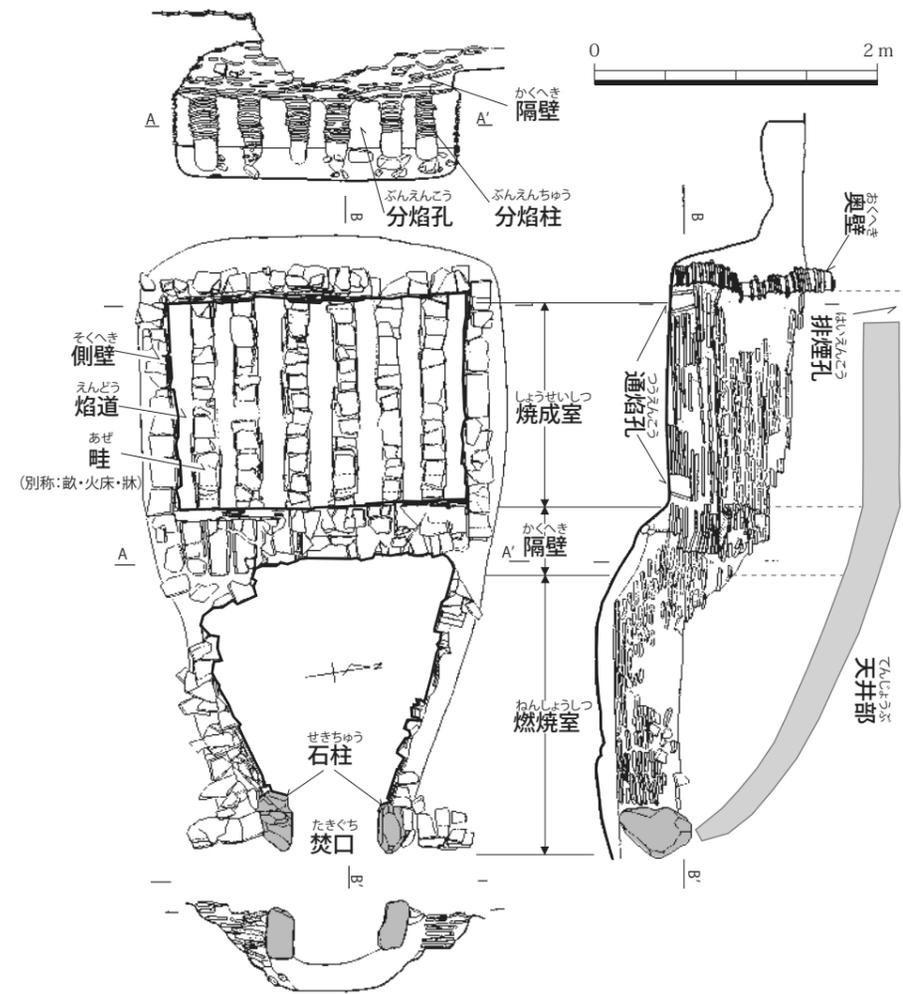
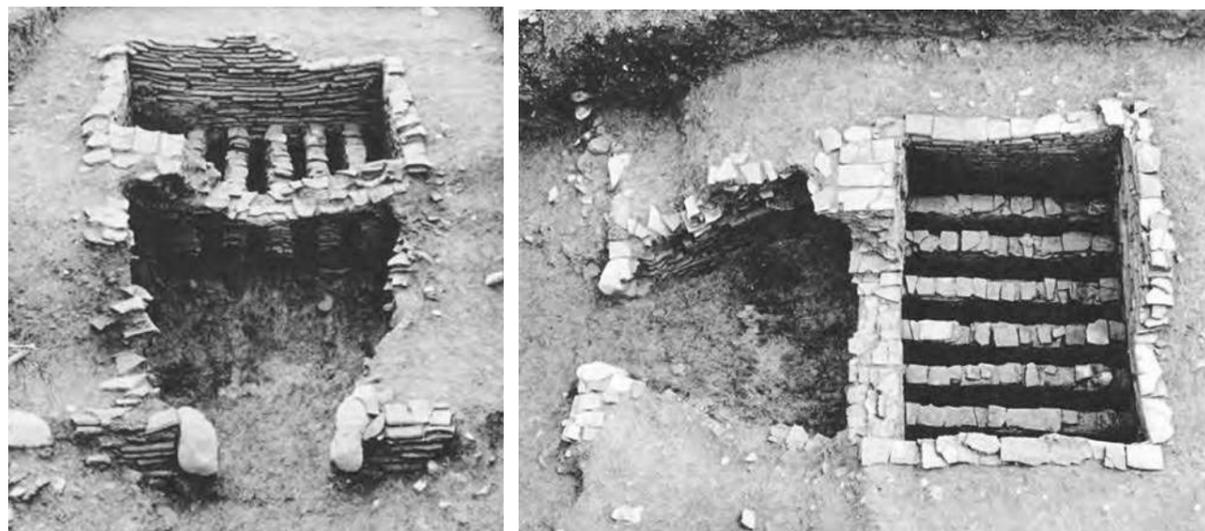


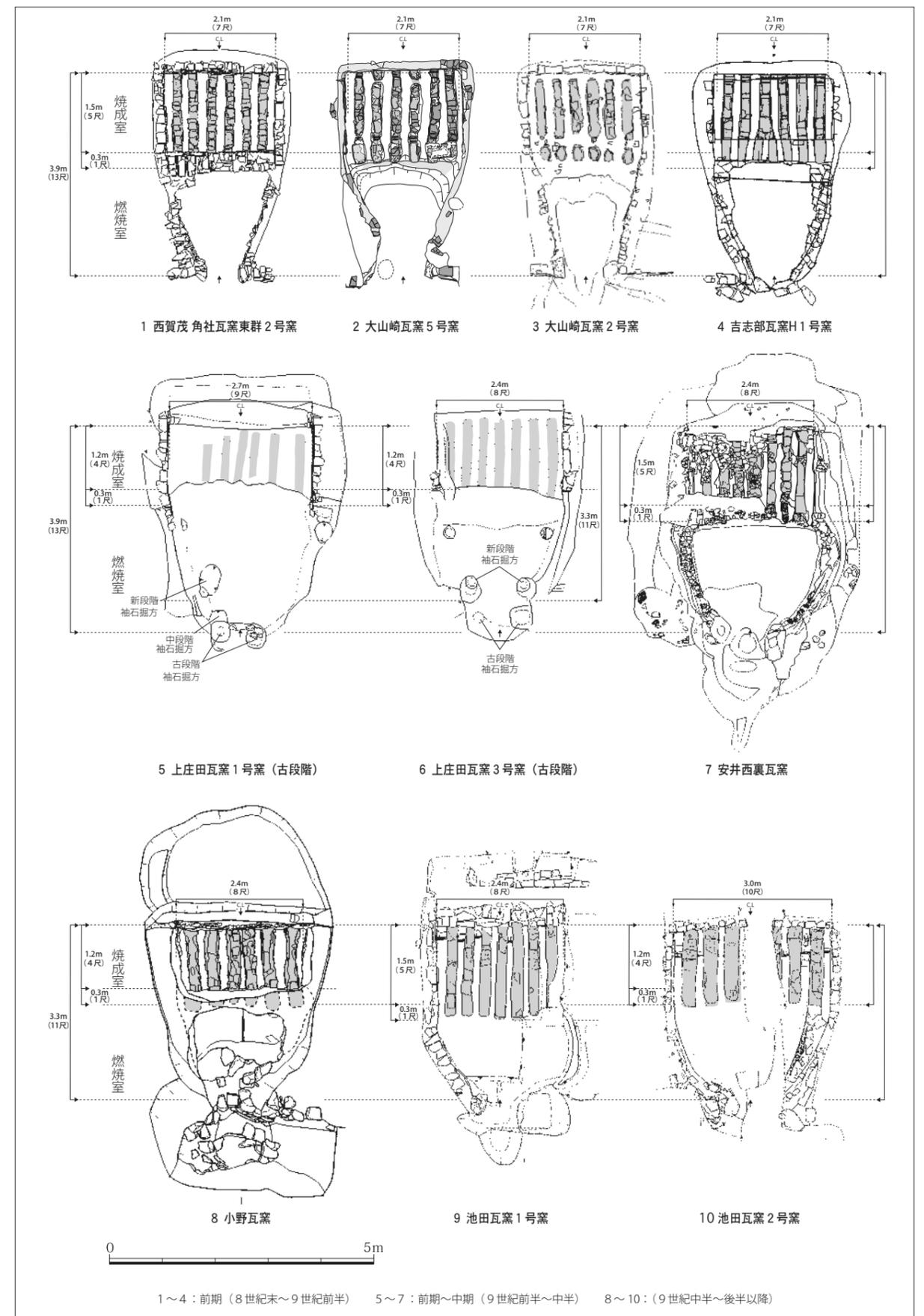
図5 西賀茂角社東群2号窯 1:50



1-1 (正面から)

1-2 (側面から)

写真1 西賀茂角社東群2号窯



1~4: 前期 (8世紀末~9世紀前半) 5~7: 前期~中期 (9世紀前半~後半) 8~10: (9世紀後半以降)

図6 平安時代前期・中期の瓦窯の規模・規格 1:100

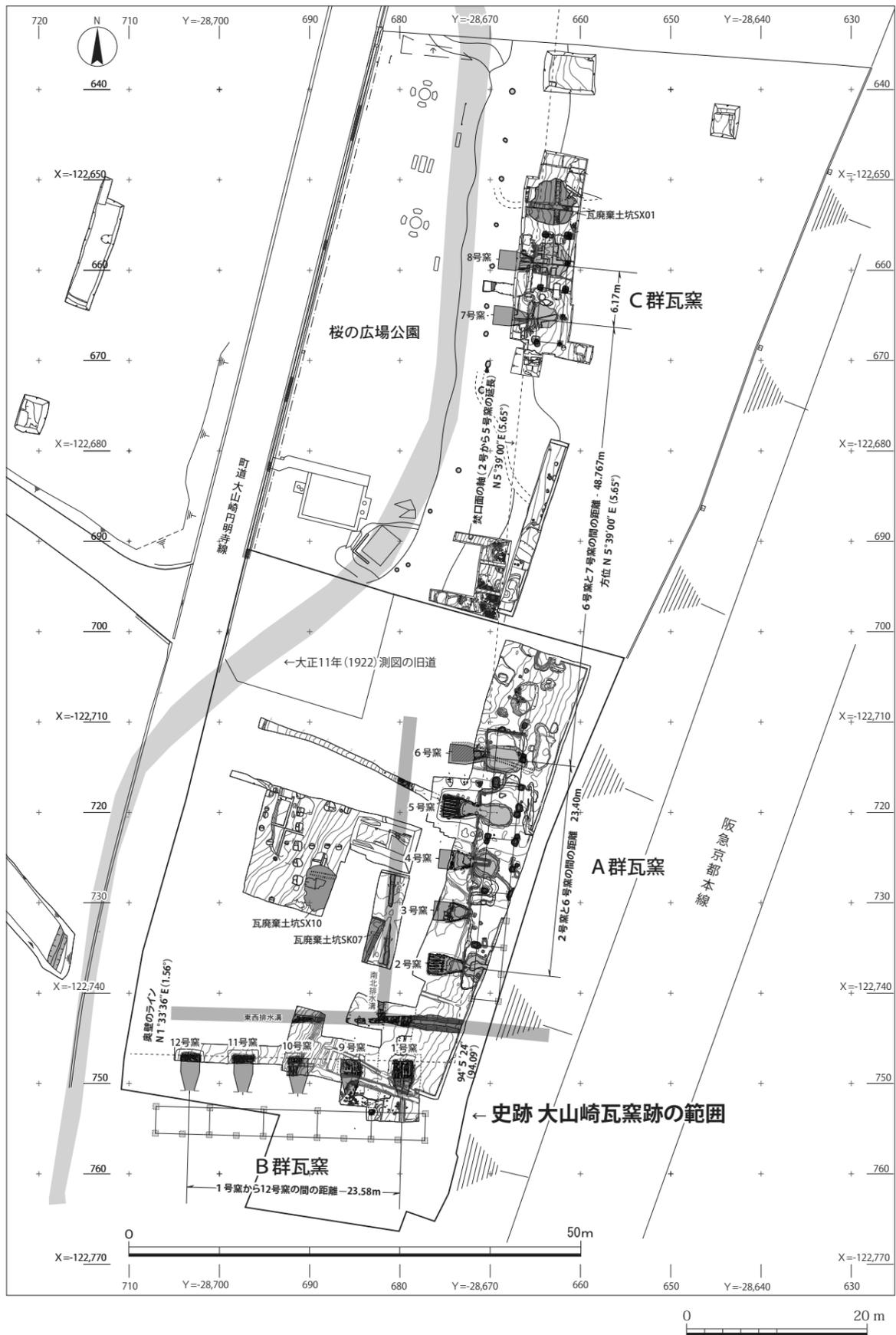


図7 大山崎瓦窯跡における窯の配置 (A群~C群) 1:600

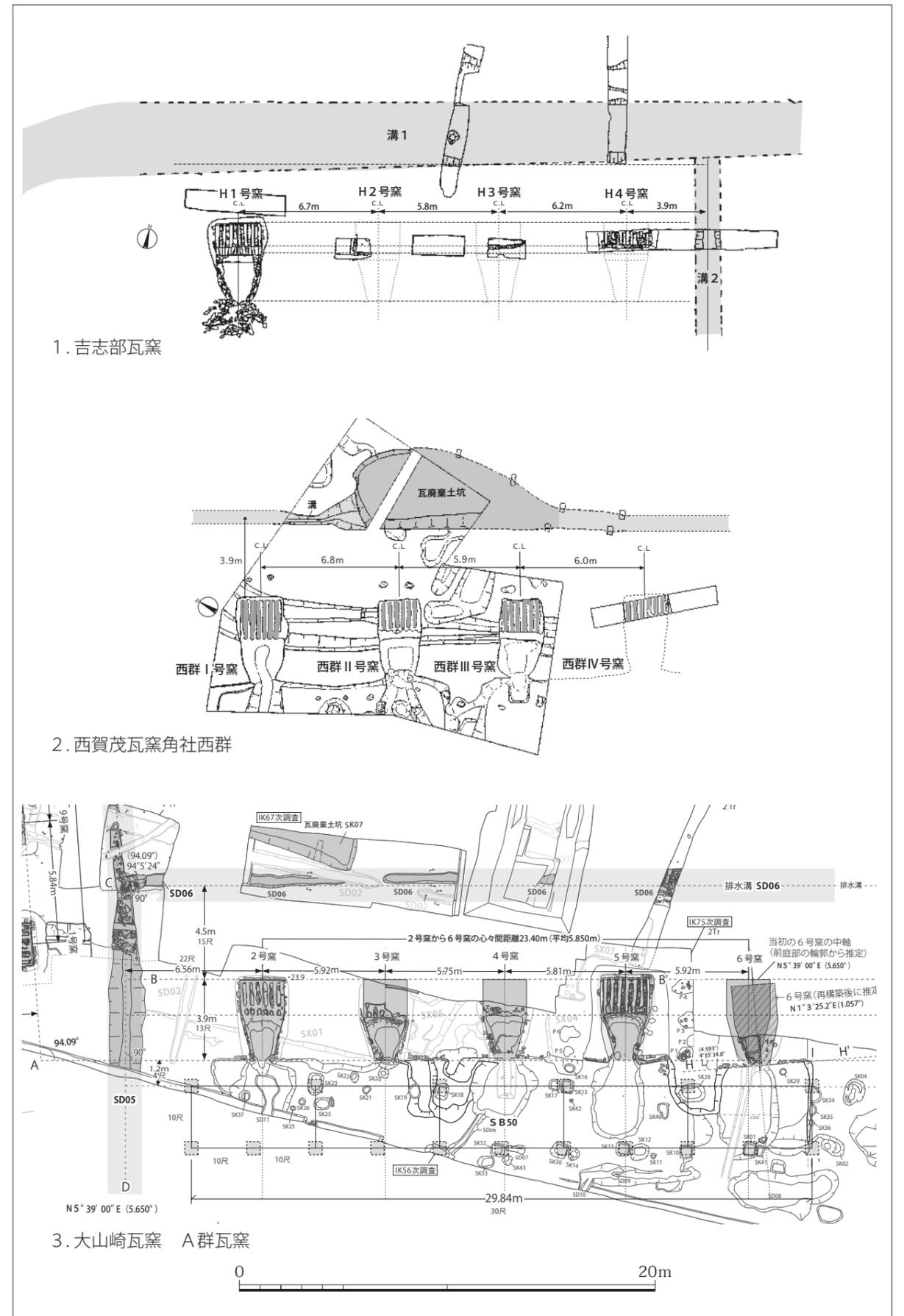


図8 瓦窯の配置と背後の排水溝 (1:250)

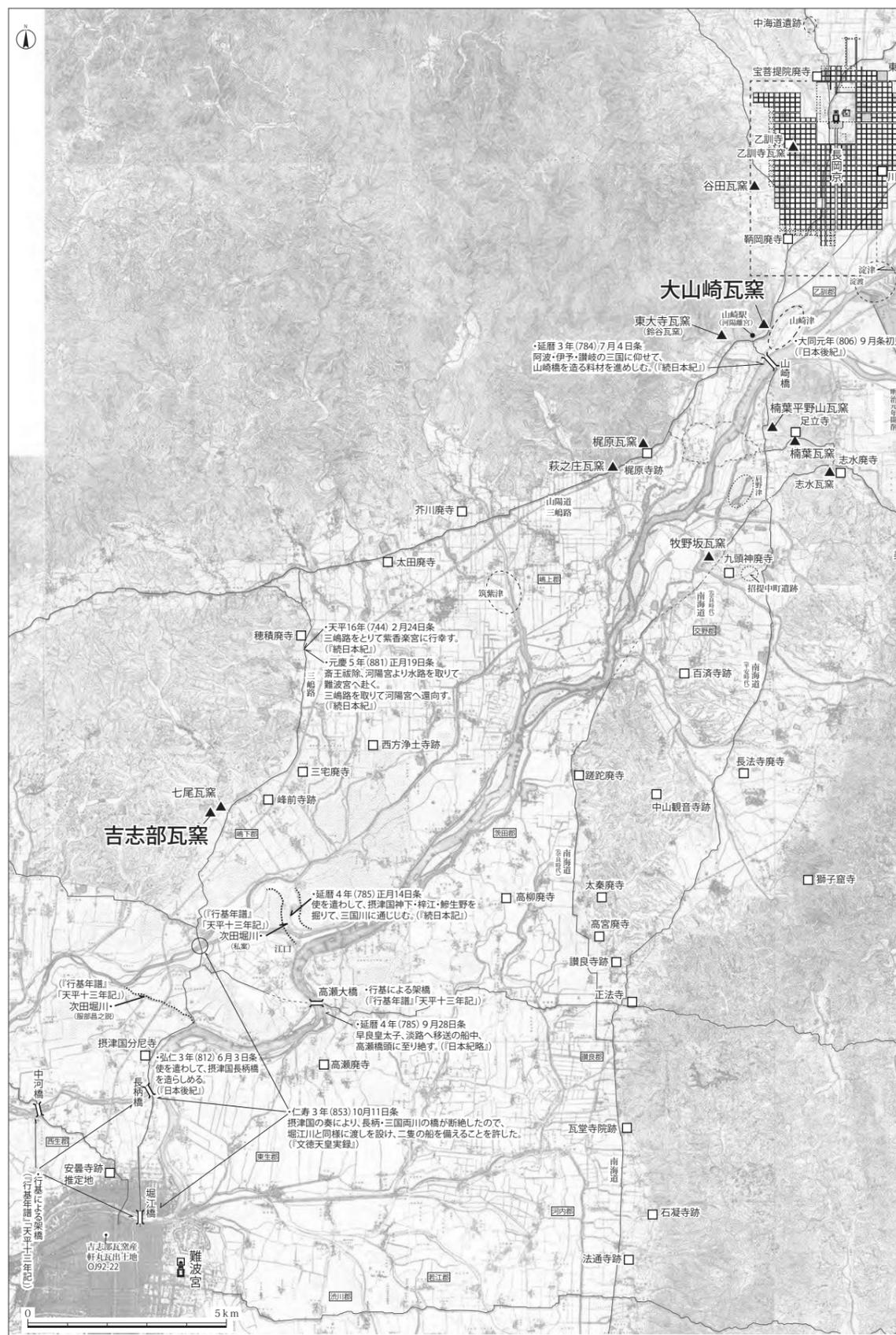


図10 淀川流域における瓦窯・交通路

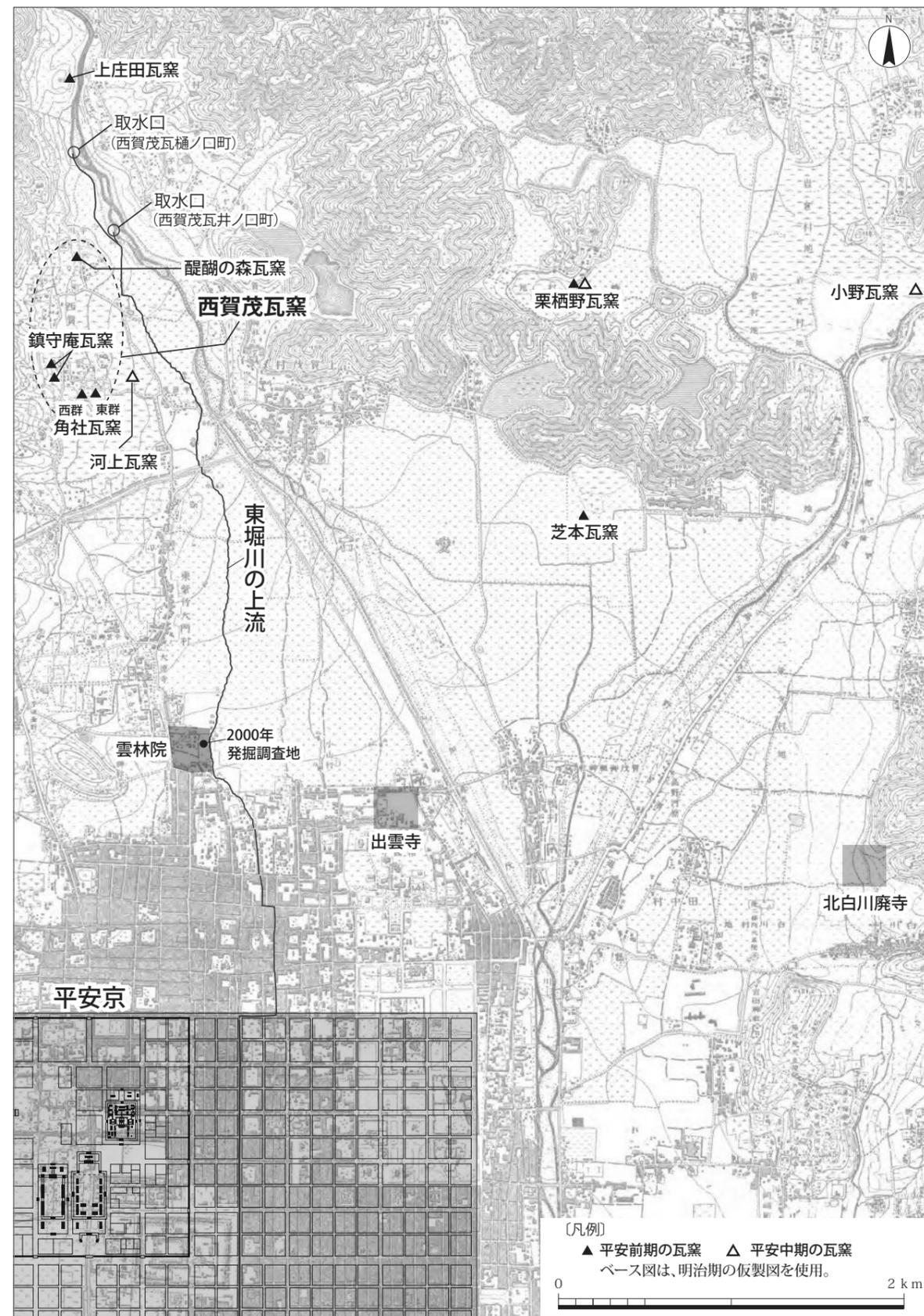
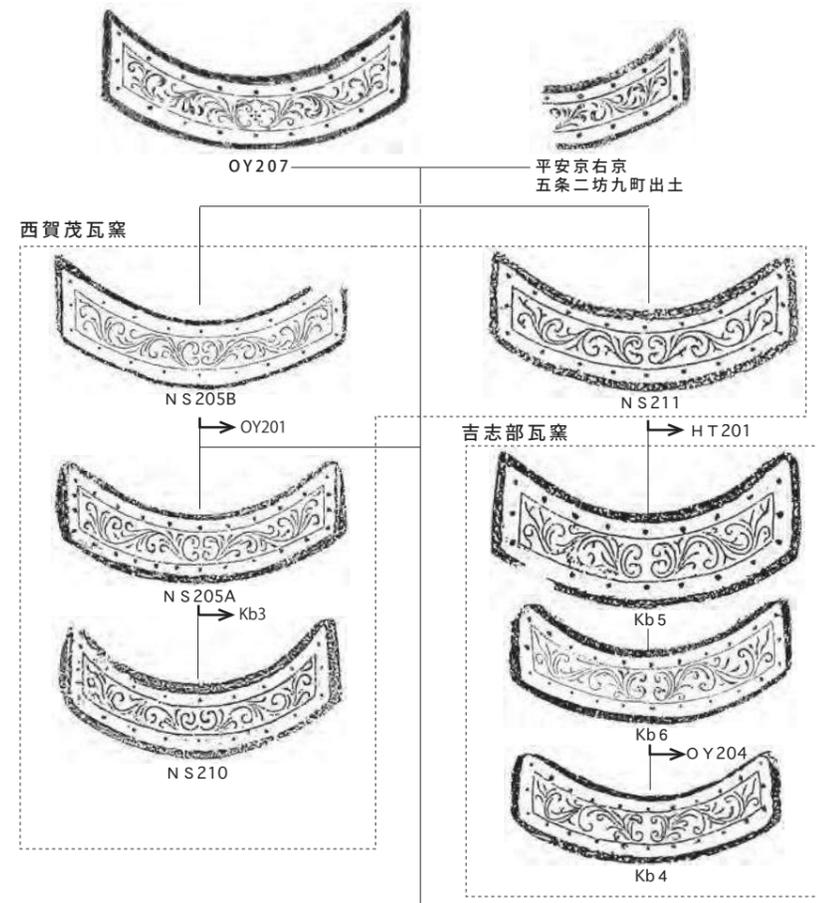


図11 平安京北郊における瓦窯等の分布 1 : 32,000

対向C字形1類

延暦期(造宮使・造宮職)の文様の展開



対向C字形2類

弘仁期以降(木工寮)の文様の展開

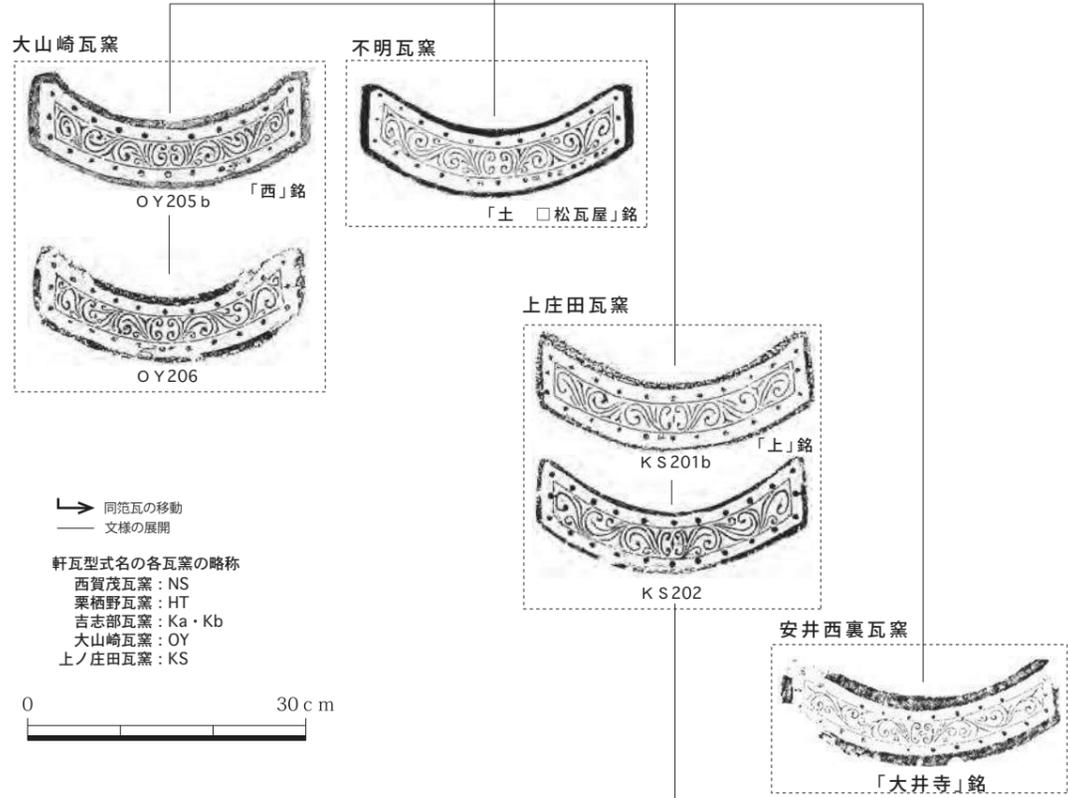
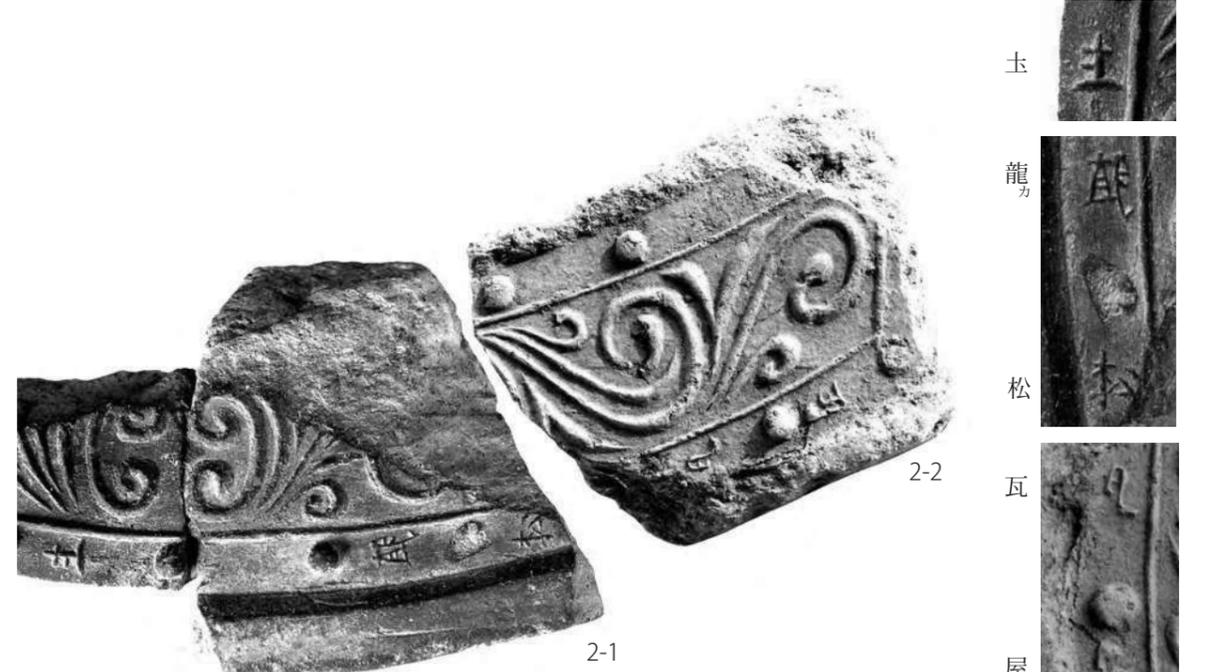


図12 平安京前期における対向C字形の軒平瓦の展開



1. 「西」銘軒平瓦 (大山崎瓦窯産 OY205b、豊楽院出土)

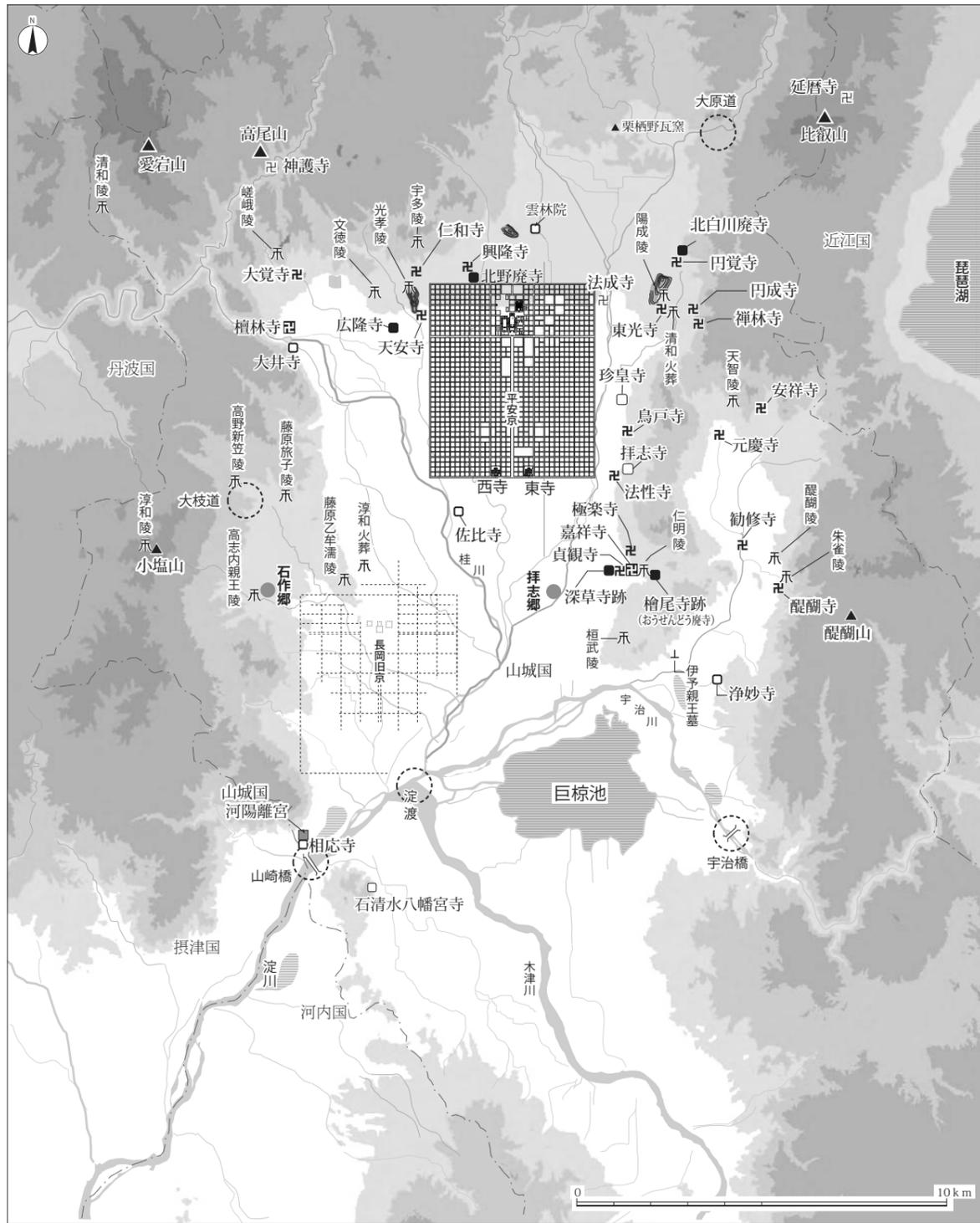


2. 「土 □ (龍) 松瓦屋」銘軒平瓦
〔産地不明、西市周辺出土 (2-1)、千本通榎木町通東入の下水工事出土 (2-2)〕



3. 「上」銘軒平瓦 (上庄田瓦窯出土、KS201b)

写真2 瓦范に刻まれた文字の諸例



〔凡例〕

- ・承和3年(836)～天曆2年(948)までの間に所在した主な寺院を示した。
- ・寺院の表記は、御願寺を で、それ以外の寺院を で示した。
- ・複弁4弁蓮華文軒丸瓦が出土する寺院は、 で示した。
- ・陵は、桓武陵〔延暦25年(806)崩御〕から朱雀陵〔天曆6年(952)崩御〕までを で示した。
- ・「山城国五道」の要地は、 で示した。

図13 平安京周辺の寺院(御願寺)と陵墓の分布

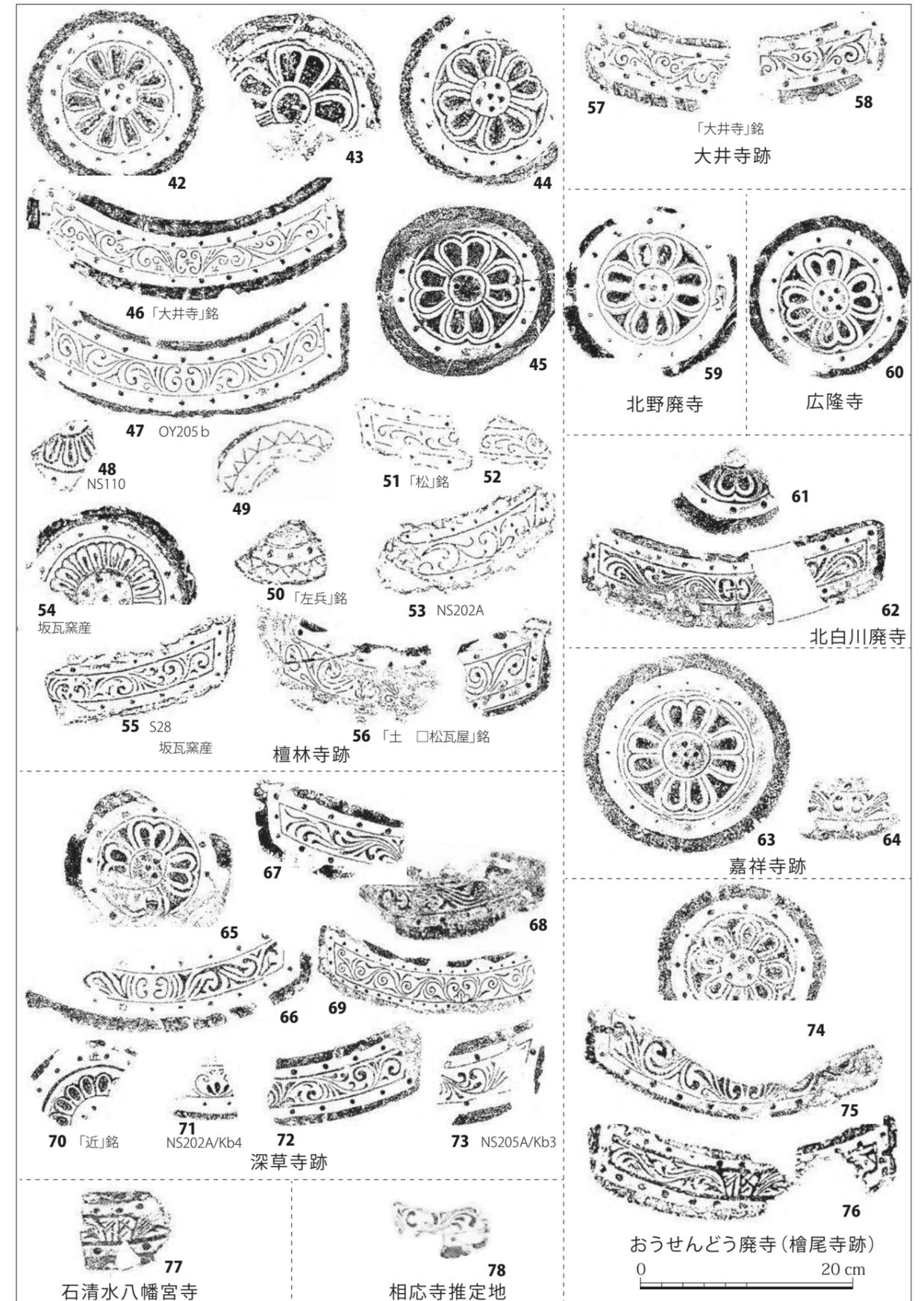


図14 平安京周辺諸寺の出土瓦(3)